

IV-10

歴史的橋梁の景観保全手法に関する実態分析

埼玉大学工学部 学会員 宇都木勇一

埼玉大学工学部 正会員 窪田 陽一

1. はじめに

歴史的橋梁（明治、大正、昭和初期）は歴史的価値があり、時代の変遷の中で地域の背景や周辺環境に馴染んでいくことによって景観的に重要な存在であった。しかし、近年様々な方法で、かたちの継承や復元に多くの努力が払われてきている一方で保全状態がよくないものが多い。そこで、本研究では歴史的橋梁の竣工当時と現在の状態を比較しその違いを明らかにし、歴史的橋梁を保全していく上で配慮すべき点をまとめ、今後歴史的橋梁をより良い状態で保全するための手法を探ることにした。

2. 調査

東京市においては、関東大震災前までに橋梁約 600 橋の橋梁が架けられた。そのうち永久橋の架設は年に 3, 4 橋程度であった。震災復興橋梁として架けられた橋梁は 425 橋ありそのうち現存する橋梁は 73 橋である。これら歴史的橋梁の竣工当時の状態と現在との違いを比較するため、文献で当時の写真を集め、それと同じ角度で現状を撮影し歴史的橋梁が現在どのように変化しているのかを探った。調査は全部で 46 の橋において行い、現存しているものが 28 橋、架替えされていたものが 12 橋、河川の埋め立てにより橋が撤去されたものが 6 橋である。

3. 歴史的橋梁の景観保全手法の分類

現地調査で考慮した保全手法は現存する橋梁については親柱、高欄、照明、橋側灯、などの要素に着目して分類を行い、架替えされた橋梁に関しては一部再利用、部分再利用、イメージ保存、移築保存に分類した。河川が存在しなくなった橋が撤去された場合については親柱の保存、橋詰の名残などで分類しそれらの保全手法が有効に機能しているかについて、分析を行った。表 1 は文献調査と現地調査により得られた手法を分類したものである。

キーワード : 歴史的橋梁 景観保全
連絡先 : 〒338-8570 浦和市下大久保 255
TEL 048-858-9549 FAX 048-855-9361

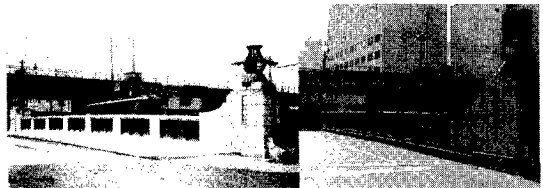
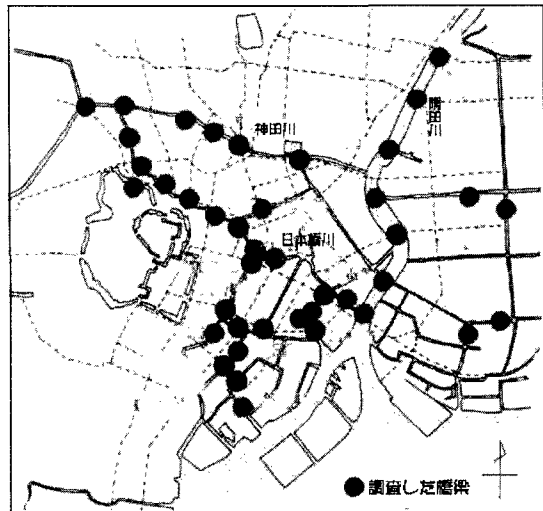
図 1 昌平橋²⁾ (1923)

図 2 昌平橋 (現在)

図 3 調査対象地域と対象橋梁の位置

表 1 保全手法の分類

大分類	中分類	小分類
現位置保全	全保存	現存
		併設
		本体構造の再利用
	再利用	高欄や親柱などの付属物の再利用
		全復元
	復元	部分復元
		新橋にあわせて復元
		橋詰に説明板・記念碑・レリーフの建立
	イメージ保存	橋詰に高欄や親柱などの付属物の保存
		現役
移築保全	全移築	展示品
	部分移築	現役
		展示品
		橋詰を残す
解体廃棄	イメージ保存	親柱、高欄を現地保存する
		親柱、高欄を移築保存する
		記念碑やレリーフの建立
		写真、図面などの資料保存
		名称保存

（１）現存

- a)高欄 視覚的連続性を狙ったものが数多くあったが近年、高欄の設計上の規定の変化で付け替えられることがあるが連続性を無視して整備される傾向がある（図４）。また、戦時中の金属供出により高欄パネルが取り除かれている場合があり、復元が十分になされていないことが多い。
- b)橋灯 竣工当時は目立たないように設置されていた照明の基準の変化によりそのような配慮に欠けるものが多い。（図５）。
- c)親柱 周辺の環境の変化により切断されたり、戦時中の金属供出により、上に乗っていた燈火が紛失した例も見られた（図６,7）。
- d)橋側灯 舟運に対する機能的配慮で、主桁の側面に取り付けられたものだったが最近では見られなくなりペンキで橋名が描かれているものが多くなっている。

（２）架替え

橋詰に説明板が保存されるイメージ保存が最も多い。橋詰に旧橋のものが保存されている場合があるが保存状態が良いものが少ないので、維持管理を含めた保全手法が望まれる。今後、イメージ保存よりも景観保全上の効果が期待される再利用、復元、移設保存が適用されることが望まれる。

（３）河川の埋め立てにより橋が撤去

橋が無くなっても橋名が残るなど橋の名残が見られる。親柱や高欄は橋詰を残した場所に保存しやすいが高欄に関しては事例がなかった。今後このような保全方法も実施されていくべきである。

4. 結論

本調査の結果、現存している橋梁についても規制や災害による変化が多く、本来の設計思想が踏襲されずバランスが崩れているように思われる（表２）。今後、竣工当時の姿を十分に検証して橋梁全体のバランスを考えながら保全してゆくべきである。

5. あとがき

歴史的橋梁は当時の技術や意志決定の考え方を将来に伝える貴重な情報源であり、土木技術の近代化

変遷の記録でもあることから今後の設計を考える際の有効な知見となりうる。現存しているものについては過度な装飾をやめ、撤去されるときには、景観保全手法を有効に適用して、土木遺産を保全、継承していく必要がある。

表 2 橋梁が変化した要因

年	橋梁に変化をもたらした主な要因	橋梁の変化
1868	明治維新	材料、技術の導入
1923	関東大震災	多くの橋梁が無くなり425橋が架けられる
1938	金属供出令	照明、親柱、高欄、橋側灯
1945	東京大空襲	周辺環境
1959	首都高速道路の建設	河川の埋め立てに伴う撤去
1964	街路計画の改訂	橋詰が計画から消える
1978	道路橋示方書の体系化	交通量が多いところでは高欄の高さが90cm以上
1979	照度基準の設置	照明
1980	道路橋示方書改訂	交通量が多いところでは高欄の高さが110cm以上
1988	照度基準の改訂	照明

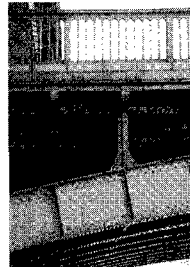


図 4 垂直部材と東柱の位置が一致していない例

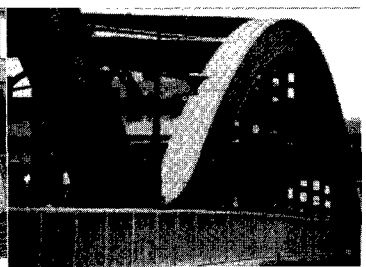


図 5 照明が目立つようにつけられた例

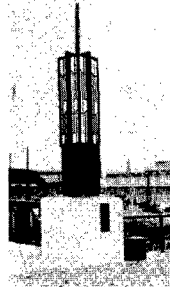


図 6 後橋橋³⁾
(1927)

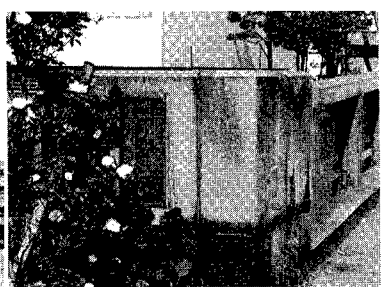


図 7 後橋橋（現在）

親柱の変化の例

【参考文献】

- 1) 絵葉書に見る日本の橋 土木図書館編 拓殖書房 1992
- 2) 水の都、橋の都 伊東孝 東京堂出版 1994
- 3) 東京の橋と景観 東京都建設局
- 4) 東京の橋 伊東孝 鹿島出版会 1986
- 5) 本邦道路橋輯覧 内務省土木研究所 1928